後期ビザンティン聖堂（13 ～ 15C）におけるプラティテラ型聖母子像

菅原　裕文

プラティテラ型聖母子像とは、図像学的に両手を拡げてオランスの姿勢を取り、胸部に祝福するキリスト・エマヌイルを伴うマリア像を指す。プラティテラとはギリシア語の「広い」という形容詞の比較級であり、「天よりも広い」というバシリオス典礼の式文に由来する尊称である。後期ビザンティン（13 ～ 15 世紀）には、この聖母子像をアプシスに配する聖堂が急増するが、本発表はその要因を考察するのが目的である。

神が顕現する場としてのアプシスには、「昇天」「主の荘厳マイエスタス・ドミニ」「デイシス」等、顕現や再臨に関する図像が配されていた。しかし、イコノクラスム（730 ～ 843 年）を経て、アプシスの図像選択に大きな変化が起こった。イコノクラスムでは人像表現の根拠となるキリストの人性、すなわち、神の受肉が争点となったが、聖像擁護派の論点をまとめると次のようになる。神の受肉により不可視の神は目に見えるようになった。ゆえに聖像の制作は神の受肉を証しする行為である。キリストの到来により旧約の予型は成就し、旧き契約の時代は終焉を迎えた。よって、かつては天使や預言者にしか見られなかった神を、人間も画像を通じて見ることができる。こうして、旧約的な「顕現」図像はアプシス装飾としての重要性を失い、聖変化の儀式がなされる祭壇の真上に位置するアプシスは神の受肉を直接的に想起させる聖母子像の場となる。中期ビザンティン（9 ～ 12 世紀）でアプシスに好まれたのは、キリストの玉座たるマリアを描く聖母子坐像とオランスの姿勢が寄進者の加護を約束するブラケルニティッサ型マリア像である。とりわけ、前者は収集した 56 作例の内 30 例と半数以上を占める。

プラティテラ型も 11 世紀にはアプシス飾るようになるが、後期には 109 例の内 50 例と、中期に主流となった聖母子坐像を抜いて、収集作例の半数近くを占めるようになる。プラティテラ型をアプシスに置く後期の聖堂は、オフリドのボゴロディツァ・ボルニチュカ聖堂（1368 年頃）等、小規模な単廊式の聖堂がほとんどである。プラティテラ型をアプシス装飾に持つモニュメンタルな聖堂は、収集作例ではストゥデニツァ修道院のボゴロディツァ聖堂（1233/34 年）のみである。ここで、プラティテラ型はなぜ小聖堂のアプシスに好んで選択されたのかという疑問が浮かぶ。

プラティテラ型はオランスゆえに、ブラケルニティッサ型同様、寄進者への加護を約束する図像と目されていたと思われるが、胸に伴うキリスト・エマヌイルゆえに神の受肉をも想起させる図像とも見なされてきた。例えば、トリコモのパナギア・テオトコス聖堂（12 世紀）のプラティテラ型は左右には、「おめでとう、光を産みながらいかにこれが起こったか知らぬ方」と、神の受肉を讃えるアカティストス讃歌第 3 連に言及する銘文が付されている。また、アルバニア、マリグラードのシャーン・マリ聖堂（1369 年）では、エマヌイルのメダイヨンがマリアの懐に潜り込む様子が描かれ、プラティテラ型が受肉との関連で理解されていたことを物語る。さらに、聖母子像には様々な仕草やアトリビュートを持つ天使が伴うことがあり、付加された天使が聖母子像に更なる含意を加えることもある。

後期ビザンティンにおいて、小聖堂のアプシスに多義的な解釈を許すプラティテラ型が好まれたのは、後期に見られる聖堂装飾の多層化・複雑化といった現象と無関係ではないだろう。イコノクラスム以後のカッパドキアでは、聖堂装飾プログラムは絵巻物を拡げたように各エピソードを配列し、時間的な契機にキリスト伝が進行する連続説話サイクルをとっていた。それが 11 世紀になると、典礼暦の整備、儀式の執行方式の変化、ギリシア十字式建築の導入による内部空間の複雑化に伴い、キリストの生涯から主要な 12 場面を抽出し、これを核とする十字大祭サイクルを採るようになる。後期になると十二大祭サイクルを核に受難伝図像が大幅に増補され、多層で複雑なプログラムを採るようになる。後期の画家が直面したのは、小さな壁面でいかに多くのメッセージを観者に伝えるかという問題であり、そこで観者への加護と受肉を約束する、多義的なプラティテラ型がこの時期のアプシスに配されるようになったと推察される。

写本学 (codicologie) とリヴァイヴァル

西間木　真

中世写本研究において « rivival » という語は、失われた史料や著しく損傷した史料の「復元」あるいは「修復」作業との関連で用いられることが多いような気がする。そこで本発表では、中世写本の修復 (restauration) 研究について最近の動向を紹介した。

第一次世界大戦および第二次世界大戦ではヨーロッパ各地で図書館が被災し、多くの中世写本が焼失した (1)。しかし戦火で焼失した写本の中には、それ以前に撮影された写真やマイクロフィルムが残されている場合がある。例えばシャルトル市立図書館は 1944 年 5 月 26 日のアメリカ軍の空爆により多数の中世写本が灰燼に帰したが、シャルトルのティエリーの『エプタテウコン』(Ms. 497-498) などの重要写本は、戦前に作成されたマイクロフィルムによって現在でも閲覧、複写が可能である (2)。そのように戦前に作成されたマイクロ資料はほとんどがモノクロ写真だが、1904 年 1 月 25 日の火災によって焼失した『トリノの時祷書』に含まれるファン・アイクの挿絵のように、デジタル画像の解析技術を用いた色彩の再現も試みられるようになった (3)。

宗教戦争やフランス革命をはじめ幾多の災害を逃れて現存まで伝えられている写本の中には、さまざまな損傷を受けたものが少なくない (4)。羊皮紙を再利用したパランプセストあるいは削除されたパッセージは、従来の紫外線ランプを用いた方法では解読が困難な場合もあった (5)。しかしやはりデジタル画像の解析技術の進歩により「フォトショップ」などの身近なソフトでこれまで解読できなかったテキストを復元できるようになった (6)。同時に複数の図書館に散逸した写本 (membra disiecta) や、製本のために再利用された断片など、従来の研究では等閑視されてきた不完全な写本の調査研究も進められている (7)。空襲に見舞われたシャルトル市立図書館の場合、焼け残った写本や残骸が消火作業にあたった消防隊員や市民によって集められ、戦後、市立図書館に保管されてきたが、現在、パリのテキスト研究所 (IRHT) において修復作業および目録作成が行われている （カタログ上は焼失したことになっていても、一部のフォリオがほぼ完全な形で残されている写本もある） (8)。テキストの伝播や受容、読書のあり方を知る手がかりとして近世以前の蔵書目録が用いられるが、再製本や合本などのために行方が分からなくなった写本がそうした古い蔵書目録の調査をきっかけに確認されることもある (9)。

発表の最後にコディコロジーの手法を用いた取り組みの例として、フランス国立図書館所蔵写本の分析を紹介した。

注）

1. Cf. M. KÜHLMANN, « Les bibliothèques dans la tourmente », in: *Histoire des bibliothèques françaises. Les bibliothèques au XXe siècle. 1914-1990*, dir. M. Poulain, Paris, 1992, p. 222-247.

2. Cf. E. LALOU, Cl. RABEL, *« Dedens mon livre de pensée... ». De Grégoire de Tours à Charles d'Orléans. Une histoire du livre médiéval en région Centre*, Paris, 1997, p. 56.

3. Cf. A. CHÂTELET, « Les miniatures de Jan van Eyck revisitées », *Art de l'enluminure*, 15 (2005-2006), p. 36-65.

4. Cf. R. CLEMENS, T. GRAHAM, *Introduction to Manuscript Studies*, Ithaca, 2007, p. 94-116.

5. Cf. L. FOSSIER, J. IRIGOIN (éd.), *Déchiffrer les écritures effacées*, Paris, 1990.

6. Cf. A. WATHEY, M. BENT, J. CRAIG-MCFEELY, « The Art of Virtual Restoration: Creating the Digital Image Archive of Medieval Music (DIAMM) », *Computing in Musicology*, 12 (1999-2000), p. 227-240 ; P. MEMELSDORFF, « New Music in the Codex Faenza 117 », *Plainsong and Medieval Music*, 13 (2004), p. 141-161 ; *Digital Image Archive of Medieval Music*: http://www.diamm.ac.uk/

7. Cf. D. Hiley (dir.), *Die Erschliessung der Quellen des mittelalterlichen liturgischen Gesangs*, Wiesbaden, 2004 (*Wolfenbütteler Mittelalter-Studien*, 18) ; A. SCARCEZ, *L'antiphonaire 12A-B de Westmalle dans l'histoire du chant cistercien au XIIe siècle. Introduction historique, analyse, fac-similés, tableaux et index*, Turnhout, 2011 (Bibliologica, 32) ; M. BENT, R. KLUGSEDER, *Ein Liber cantus aus dem Veneto (um 1400). Fragmente in der Bayerischen Staatsbibliothek München und der Österreichischen Nationalbibliothek Wien*, Wiesbaden, 2012 ; R. KLUGSEDER, *Quellen zur Mittelalterlichen Musik-und Liturgiegeschichte des Klosters Mondsee*, Wien, 2012 (*Codices Manuscripti, Supplement*, 7).

8. Cf. D. POIREL, « Les manuscrits sinistrés de Chartres : restitution d'une bibliothèque », in *L'IRHT, avenir d'une tradition*, dir. Th. Buquet, Paris-Orléans, 2007 (*Ædilis, Actes. Séminaires et tables rondes*, 13): http://aedilis.irht.cnrs.fr/irht-avenirtradition/manuscrits-chartres.htm ; *Les sources de la culture européenne et méditerranéenne* : http://www.sourcem.fr/content/les-objectifs ; *Restauration des manuscrits médiévaux* : http://www.bmchartres.fr/medias/medias.aspx?INSTANCE=exploitation&PORTAL_ID=portal_model_instance__Restauration_des_manuscrits.xml&SYNCMENU=EVENTS_MANUS 1904 年に火災に見舞われたトリノ写本の修復については S. IANNUCCELLI, « Il sapere brucia. Il restauro dei manoscritti danneggiati nell'incendio del 1904 », *Alumina. Pagine miniate*, 1 (2003), p. 44-47 を参照。

9. IRHT **編纂の叢書** « *Documents, études et répertoire: série Histoire des bibliothèques médiévales* » **を参照。**

12 世紀のサンドニ修道院における擬ディオニシオス文書の伝統

坂田　奈々絵

擬ディオニュシオス文書は 5、6 世紀頃にシリアで書かれたとされる一連の文書群を指す。12 世紀では、13 世紀に訪れる大々的な神学的受容を前にして、この文書は様々な形で取り上げられていた。その中でも、しばしば文化史における受容の大きなトピックとして扱われてきたのが、サンドニ修道院長シュジェール（c.1081-1151.1.13）とゴシック建築への影響である。シュジェールはサンドニ修道院付属聖堂の改築を行った人物であり、そこで作り出された内陣部分は、ゴシック建築様式の端緒とされてきた。そして彼の記録に見られる、神学的美意識や「光」に関係する碑文等は擬ディオニュシオス文書からの影響をうけたものである、と E. パノフスキーらによって指摘されてきた。しかしこうした見解は、現在では様々な議論の対象とされている。本発表ではそれを踏まえ、シュジェールと擬ディオニュシオスの直接的な関係について論じるのではなく、擬ディオニュシオス文書の西欧への伝来と受容について見ることから考察を行った。シュジェールには擬ディオニュシオス文書からの引用や、それについて言及を一切行っていない。一方で、パノフスキーやその他の研究者によって指摘されているところの、サンドニ修道院と擬ディオニュシオス文書の特別な関係性は、シュジェールの記述を見直す上で看過することのできない要素である。

さて、サンドニ修道院における擬ディオニュシオスの伝統は二つの面から考えられる。第一には、聖ドニ伝における、パリ司教ドニとアレオパゴスのディオニュシオの統合であり、第二には文書そのものの西欧への伝来である。これらの文書の伝来以前にも、キリスト論やイコノクラスムに関する説教や公会議文書の中で、部分的な形での擬ディオニュシオス文書への言及は行われていた。しかしこの時点では、擬ディオニュシオス文書と聖ドニの結びつけは曖昧なものである。しかし 827 年になると、ミカエル二世がルイ一世に擬ディオニュシオス文書を寄贈し、それが聖ドニの著作としてサンドニ図書館に受け入れられた。そして当時の修道院長ヒルドゥインが文書全体の翻訳を指揮し、またその内容を踏まえた聖ドニの受難伝 Post beatam et salutiferan が執筆されることによって、神学的議論の場での引用のみならず、聖ドニ崇敬そのものの方へと、擬ディオニュシオス文書の影響が及んだのではないかと仮定する。

1000 年代に書かれたとされる Caeli cives（F:PSG1186）という聖ドニ賛歌ではヒルドゥインによる受難伝を踏襲した聖ドニの生涯が物語られている。ロバートソンは、この聖歌全体の clare、lumen、splendor といった「光」にまつわる言葉の多用を指摘する。「光」の用語は、擬ディオニュシオス文書の思想体系の中核をなすものである。つまり擬ディオニュシオスは、「光」は神の働きそのものとして描写し、『神名論』にて神の最も相応しい名称として提示した。ヒルドゥインが翻訳を指揮した『天上位階論』冒頭でも、この 3 つのラテン語が頻繁に繰り返されている。また聖ドニに帰属するものとしての「光」の用語の使用は、擬ディオニュシオス文書が入る以前の聖ドニ賛歌には十分に見られない。しかしこの「光」のとりいれをもって、「光の形而上学」の思想体系そのものが崇敬のうちにとりいれられたのは困難であり、むしろ、擬ディオニュシオスの光が西欧世界にすでに存在した「光」のイメージと融合した形として受容されたのだと考えられる。11 世紀に作られたと推定される聖ドニのための韻文聖務日課（Mazarin384）には、ヒルドゥインが受難伝の中で重要なものとして取り上げた「日食」のモティーフが登場する。日食は擬ディオニュシオス文書第十一書簡に登場するものであり、ヒルドゥインはこの僅かな記述を、擬ディオニュシオス文書に通底する「光」の原理と結びつけた形で紹介した。それによって、擬ディオニュシオス文書においては形而上学的概念として強調される「光」の概念が、脱・形而上化された形でとりいれられ、それがさらに聖歌の中で用いられていることが指摘できる。

シュジェールが碑文において「光」にまつわる言葉を用いる際にも、このような「光」の受容と同様の傾向が見いだせるのではないだろうか。またそれを踏まえることによって、現在のシュジェール研究において重んじられているラテン教父や詩歌からの「光」の影響を、今一度東方からの影響を鑑みつつ、総合的に読むことができよう。

キリスト教美術とイスラーム美術が交差するところ
――中世スペインの場合――

久米　順子

イベリア半島は、キリスト教美術とイスラーム美術が交差する／した世界の広い地域の中でも、その接触が 711 年のイスラームの半島侵入から 1492 年のレコンキスタ終了（あるいは 16 世紀初頭の異教徒のキリスト教への強制改宗令など、もっと後代まで含めることも可能）まで長期間に及んだ点に特徴がある。すなわち中世スペインの美術史は、そのままとりもなおさずキリスト教美術とイスラーム美術の交流史でもある（本報告では触れられなかったが、正確にはさらにユダヤ教美術も含めなければならない）。本報告では、時代順に両者の関係を概観し、研究の現状をまとめて、研究上の難しさや問題点、今後の課題などを提示した。

アル・アンダルス（イスラーム・スペイン）が政治的経済的文化的に栄華を誇った 11 世紀の初頭までは、キリスト教美術とりわけベアトゥス写本と呼ばれる写本挿絵の中に、イスラーム文化への憧憬とその受容を見て取ることができる。しかし同時に、キリスト教圏におけるレコンキスタ概念の生成と発展を反映して、イスラームを想起させる図像は反キリストを意味する否定的な文脈でも用いられる。

一方、アル・アンダルスで作られた象牙、クリスタル、金属、織物などの工芸品は、外交上の贈り物や貢納金の一部として、あるいは略奪品・戦利品として、キリスト教圏に運ばれ、ときにはイベリア半島の外部にまで持ち出されて珍重された。現在まで伝わる作品の多くは聖堂や修道院の宝物である。それらがイスラーム起源であることが意識されたと考えられるケースとそうとは考えにくいケース、両方あることを例を挙げながら指摘した。

これらの工芸品はもとより、写本装飾にも、さらにはキリスト教聖堂の壁画にも、中世スペインの美術には至るところにアラビア文字の、あるいはアラビア文字風の銘文が登場する。これらの解読の可能性をめぐる諸問題と、そうした銘文が用いられたこと自体がどのように解釈されうるかという問題にも言及した。

アラビア文字の銘文に関連して、13 世紀初頭の制作とされるトレドのサン・ロマン聖堂（現公会議・西ゴート文化博物館）の壁画を紹介した。サン・ロマン聖堂や同時代のトレドのクリスト・デ・ラ・ルス聖堂の増築部分とその壁画などは、美術史ではムデハル美術・建築と称される。ムデハルとはキリスト教支配下のムスリムのことで、すなわち彼らが制作に関与した 12 － 16 世紀のイベリア半島の美術・建築を指して用いられる。しかし 10 世紀のいわゆるモサラベ美術・建築と同様、その年代・地理的な範囲や正確な定義を巡ってはいまだに多くの議論がある。

報告の最後には、イスラーム美術に取り入れられたキリスト教美術の例として、グラナダのアルハンブラ宮殿獅子宮のパティオ東側にある諸王の間（別名正義の間）に描かれた天井壁画を紹介した。

キリスト教美術とイスラーム美術の影響関係と一口に言っても、完全な融合・同化、同化抜きの理解、選択的意図的な無視や排除、知識不足から来る誤解・無理解など、様々なレベルが存在し得たことは言うまでもない。中世イベリア半島の歴史的解釈はこれまで「宗教的敵対意識と憎悪に満ちた社会」と「三宗教が共存した寛容な社会」の両極の間を揺れてきた。単純で一面的な理解に安直に陥らず、複雑な両者の関係を深く理解するためには、それぞれの作品の個別研究をこつこつと積み上げていくしかないだろう。

ギリシア語からシリア語、アラビア語への翻訳
――誰が何をなぜ翻訳したのか――

高橋　英海

古代ギリシアの科学や哲学に関する書物がしばしばシリア語を経てアラビア語に翻訳され、さらにアラビア語からヘブライ語、ラテン語に翻訳されるという形で地中海を巡り、西欧における学問の発展に大きな影響を与えたことはよく知られている。この中で、シリア語、アラビア語への翻訳は、ラテン語への翻訳への前段階として扱われることが多く、シリア語訳、アラビア語訳自体やそれらを取り巻く環境の研究はややもするとないがしろにされてきた。（さらに付け加えるならば、東アジアに住む我々としては、ギリシアの学問の地中海を巡る伝承のみではなく、地中海を離れて東方へと向かった伝承にも目を向けるべきであろう）。ここでは、講演者が主な研究対象とするシリア語への翻訳、および、それに次ぐ時代のアラビア語への翻訳の概要を紹介しつつ、翻訳活動の動機についての考察を試みる。

最初期の非キリスト教文献のシリア語への翻訳としては、5 世紀末ないし 6 世紀に遡る道徳書、文法書、農学書などの翻訳がある。中でも道徳書はシリア語圏での初等教育のための教科書として使用された可能性が考えられる。

次いで、6 世紀にはガレノスの医学書やアリストテレスの論理学書などの翻訳が見られる。医者としても活躍したレーシュアイナーのセルギオス（536 年没）による『テオドロス宛範疇論註解』の序文は、ガレノスの著作の中に見られる論理学への関心がセルギオスらがアリストテレス哲学に関心を抱くきっかけとなった可能性、すなわち、まずは実学としての医学への関心があり、医学の研究が哲学への関心を生み出した可能性を示唆する。

シリア語話者たちが住む地域がイスラームによって征服された 7 世紀中頃以降にはケンネシュレー修道院が翻訳活動の拠点となった。セウェロス・セーボーフト（666/7 年没）の『キプロスのバシレイオス宛書簡』には学知を自分たちの専有物とみなすギリシア人に対する批判が見られ、シリア語話者の間での「民族主義」が翻訳の動機として重要な役割を果たしたことを示唆する。（セウェロスのこの書簡には、学知を独占しようとするギリシア人異教徒をキリスト教徒として批判したナジアンゾスのグレゴリオスの『ユリアノス駁論』などが影響を与えている可能性も考えられる）。

8 世紀後半以降、アッバース朝の支配下では、アラビア語への翻訳と相まってシリア語への翻訳も行われたが、この時代のシリア語訳の多くは残念ながら伝存しない。アッバース朝初期に活躍した総大司教ティモテオス 1 世（823 年没）の書簡はこの時代のシリア語圏の教会における学術のあり方について重要な知見を提供してくれる。

アッバース朝期のアリストテレスのアラビア語への翻訳およびアラビア語によるアリストテレス註解は、最初期の翻訳、キンディー（870 年没）を巡る集団による翻訳、フナイン・イブン・イスハーク（873 年没）らによる翻訳、アブー・ビシュル・マッター・イブン・ユーヌス（940 年没）に始まる「バグダードのアリストテレス学派」による翻訳および註解に分けることができる。

アッバース朝期の「翻訳運動」についての近年の説明としては、運動の背景をササン朝ペルシアの伝統に求める Dimitri Gutas の説や、運動の起源をウマイヤ朝期の官僚の活動に見出す George Saliba の説が重要である。ともに重要な新たな視点を提供してくれるものではあるが、今後、世界の文化史上の一大事でもあるこの「翻訳運動」についての理解を深めていく上では、翻訳活動の中核を担ったシリア語キリスト教徒の間の動向についても改めて検証することが求められる。

地中海からピレネーを越えて
――中世ヨーロッパの自然科学　知の受容と伝播――

岩波　敦子

知をめぐる営為は、人と人との接触・交流から常に生まれる。学知の基盤として現代まで継承されている古代ギリシアの科学知もまた、さまざまな脈流を通って各地へと伝播してきた。しかしその道筋や進度は一様ではなく、偶然ともいえるテクストの継受に左右されたといえるだろう。

自由七科 artes liberales 中の quadrivium に属する算術、幾何、天文学はいずれもアラビア世界を経由したギリシアの科学知を礎とする。一般によく知られているヨーロッパ中世の科学知の伝播を、どのテクストがどの時期に誰によって、アラビア語あるいはギリシア語からラテン語に翻訳されたのか、可能な限り確認・整理することが本報告の目的である。

限られた情報源から確定できる事実には限界があるが、一般に流布している言説に縛られずに、史料から確認できる事実を明らかにすることが不可欠である。

その一例がオーリャクのゲルベルトゥス（-1003）、後の教皇シルウェステル 2 世にまつわる伝承である。ゲルベルトゥスは当時最新の機器である天体観測儀アストロラーベや天球儀を使用して教授したことが知られているが、インド・アラビア数字をヨーロッパに紹介した人物と考えられてきた。イスラーム世界を経由した科学知を操るゲルベルトゥスについては、12 世紀のマームズベリーのウィリアムによって魔術師伝説が一般に流布することになった。

インド・アラビア数字の原型である Ghubar 記号は、まずアバクス表と呼ばれる計算表に、そしてアバクスを論じたテクスト内に登場する。この漸次的浸透は 11 世紀前半ロレーヌ地方の学識者によって纏められた幾何学論稿である偽ボエティウスの *Geometrie II* において確認できる。現存する 23 の写本のうち 15 がほぼ完全なテクストとして伝わる当該論稿は、計算法の基礎となる数字の継受を探るうえで重要なテクスト群である。（Cf. 岩波論文「アバクスからアルゴリズムへ――ヨーロッパ中世の計算法の系譜」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 44 号 (2013)、43－68 頁）

いわゆる「12 世紀ルネサンス」と呼ばれる知的活動の特徴は、トレドのような知的拠点はありながらも、体系的というよりテクストの伝来状況あるいは個々人の強い知的欲求に基づいて推し進められた点にあるだろう。

中でもエウクレイドゥスの『原論』あるいはプトレマイオスの『アルマゲスト』は、アラビア語あるいはギリシア語からの翻訳の形で、様々なルートを経たいくつかのバージョンが存在するが、本報告ではその錯綜する翻訳状況を文献解題の形で整理・紹介した。

地中海世界から北西ヨーロッパへの科学知の継受と伝播を追うとき鍵となるのは、英国との接点だろう。

ペトルス・アルフォンシやバースのアデラルドゥス、マイケル・スコット、ロバート・グロステストそしてロジャー・ベイコン等、英国と縁のある学識者たちは、いずれも人を通じた知の継承に努めた。最先端の学知を柔軟に摂取しようとする彼らの論稿を個別に考察すると、テクスト伝播の外的制約と限界が鮮明に浮かび上がってくる。とりわけ本報告では詳細に扱うことのできなかった視覚論 / 光学論は、アラビアからの知の漸次的受容を探るうえで重要な考察対象である。

チャールズ・ハスキンズがいわゆる「12 世紀ルネサンス」を 1927 年に発表して以来、12 世紀を中心に多くの科学知に関するテクストが校訂されてきたが、その一方でチェスターのロベルトゥスとケットンのロベルトゥスが同人物であるかどうかなど、未だ研究者の間で一致を見ない点も少なくない。本報告では、同名異文のテクスト、作者を同定する情報の少なさ等研究上の問題点と課題を文献学の立場から指摘しつつ、ギリシア―イスラーム―ラテン世界間の科学知の継承と伝達を、情報源である写本の伝来およびその校訂に焦点を当てて考察した。

トマス・アクィナス『対異教徒大全』の意図と構造

山本　芳久

イスラーム世界を経由して到来したギリシア的な知の伝播は、ラテン・キリスト教世界に、大幅な知の地殻変動を引き起こした。そこにおいて実現したのは、従来は利用できなかったテキストが利用可能になり、知の総体が有機的に拡大する、というポジティブな事態のみではなかった。一連の知の伝播は、単に、出来上がった知的成果の導入という事態であっただけではなく、むしろ、知的な問題の導入という事態でもあった。当時の知的世界の中核部分を構成していたキリスト教神学においては、聖書伝来の知とグレコ･アラブ的な知の伝統をどのように関係づけるのか、または関係づけないのか、「理性」と「信仰」の関係、または「自然」と「超自然」の関係にどのような仕方で折り合いをつけるのかという新たな問題が、教会政治的な次元や修道会同士の対立などを孕みこみながら、新たに生まれてくることとなったのである。

本発表においては、十三世紀のラテン･キリスト教世界を代表する神学者の一人であるトマス･アクィナス (c.1225-1274) の知的営みに焦点を絞りつつ、彼がどのような態度でイスラーム哲学と対峙したか、という、受容の姿勢に関わる問題を、主著の一つである『対異教徒大全』に基づきつつ、綿密に分析した。

『対異教徒大全』については、スペインにおいてイスラーム教徒達に布教するためのドミニコ会士のためのマニュアルとして執筆されたという理解が従来根強く存在していた。だが、このような解釈には、様々な難点がある。

第一に、『対異教徒大全』は、『哲学大全』という別名を付されてきたほどに豊かな哲学的議論に充ち満ちており、その内実は、「初学者のための入門書」とトマス本人によって規定されている『神学大全』と比べてもより高度で難解なものであり、その全体を宣教のマニュアルというジャンルに収めることは困難であるという難点がある。

また、第二に、『対異教徒大全』は、確かに、様々な誤謬に対する論駁に満ちている著作ではあるが、誤謬が指摘される相手は、イスラーム教徒に限定されてはおらず、ユダヤ教徒、古代キリスト教の異端、古代ギリシアの哲学者など、かなり多岐にわたっているものであるという点も、イスラーム教徒相手の宣教的・護教的な著作という位置づけを困難にするものである。

第三に、イスラームに対するトマスの知識は、偏見に満ちた通り一遍のものであり、既にラテン語に訳されていたクルアーンに直接触れた形跡も見受けられない。ドミニコ会は、論争相手の言語や思考形態を熟知したうえで批判することを重視しており、そのような基準から見ると、『対異教徒大全』は、異教徒に対するドミニコ会の宣教マニュアルとしての基準を満たしているとは到底言えない。

そうではなく、同書の真骨頂は、グレコ・アラブ的な哲学の伝統との批判的対話に基づいた改変的摂取のうちに見出すことができる。『対異教徒大全』は、「異教徒」を変化させる――すなわち改宗させる――ことを目的としているというよりは、キリスト教徒が自らを変化させる――グレコ・アラブ的な異教世界において発展を遂げてきた「自然理性」に基づいてキリスト教的真理を考察しなおす――ことを目的としており、そして、そのような「自然理性」に基づいたキリスト教の自己理解の変容は、そのような変容のツールであった「自然理性」そのものがどのようなものでありどのような可能性と限界を担ったものであるのかということに関する新たな理解を与えるという意味において、「自然理性」そのものをも変容させていくのである。

トマスは、グレコ・アラブ的な哲学の伝統のなかに具体化されたそのような「自然理性」を摂取同化し、そのような「自然理性」に基づいて自らも議論を進めるとともに、アリストテレスのテキストに対する注釈という仕方で具体化されてきた「自然理性」による探究の成果を、批判的に掘り崩しもする。そのような意味において、『対異教徒大全』におけるトマスの知的営みは、グレコ・アラブ的な知の伝統――すなわち異教的世界を中心に展開してきた哲学的な知の伝統――との対峙のなかで自己を再定義しようとする営みとして解釈することができよう。それは、グレコ・アラブ的な理性の伝統の受容と批判のなかでキリスト教的な知恵を再構築する作業であったのである。

The Booke of Ghostly Grace
――ハッケボーンのメヒティルドの霊性と中世医学――

久木田　直江

医療文化人類学の論客バイロン・グッドは、各々の社会は独自の仕方で疾病経験を解釈すると唱えるが、病という経験にいかなる解釈を与えるかは、それぞれの社会や文化と密接に結びつき、そこに多様な言語表現、言説、図像表現が現れる。この報告では、病気、健康、生、死などの問題について、キリスト教会の教えが大きな影響を与えた中世末の西洋社会に焦点を当て、中世の心身相関性をキリスト教の文脈で考察し、宗教文学、医学書などから表象文化論的に考える。特に、病についての解釈を形成する上で、言語表現が担った役割を考察し、キリスト教徒の心性の根底にあるキリストの身体（聖体）へのデヴォーションを医学と宗教を結ぶ中心的表象と位置づけた。

具体的には、汎ヨーロッパ的影響力をもったヘルフタ修道院の修道女、ハッケボーンのメヒティルド (Mechthild of Hackeborn, 1240-98) の *Liber specialis gratiae*（『特別な恩寵の書』）を霊的治療のテクストとして読み解き、メヒティルドの身体的で感覚的な啓示・幻視が中世の regimen sanitatis の理論と実践についての基本的知識に根差すことを検討した。特に、「六つの非・自然」の情念について注目し、音楽が心身の健康に果たした役割について探り、メヒティルドの心身が、天上の音楽、香り、イメージなどの五感に作用する経験によって歓喜に満たされ、回復していく様子を検証した。同時に、心身両面の健康の根底にあるのは中世末のキリストの身体へのデヴォーションであることを鑑み、キリストの身体が楽器、美味なる食べ物、膏薬として霊的治療の道具となることに焦点を当て、メヒティルドの啓示が、苦しみから神秘の一致を求め永遠の至福に至る、心身の癒しのプロセスであると解釈した。

メヒティルドの霊的経験は、ギリシャ医学の理論と実践の基本にある「六つの非・自然」がキリスト教の信仰に吸収され、中世末の神秘家の霊的治癒の言説に開花した一つの例と言える。メヒティルドの啓示のなかの医学言説・比喩表現を検討することで、宗教と医学の共生的関係、また医学言説が神秘的霊性のなかに融合していく様子が浮かび上がる。

尚、本報告では 15 世紀初頭の中英語翻訳、*The Booke of Gostly Grace* から具体例を示した。

「宗教改革百周年」の挿絵入りビラ
――「図像から読み取る歴史」から「図像がつむぐ歴史」へ――

高津　秀之

マルティン・ルターが「95カ条の論題」を発表した1517年から100年後の1617年、プロテスタント領邦・都市において「宗教改革百周年記念」の祝典が行われた。これを契機としてドイツでは、多数のビラが出版されることになる。本報告では、1617年の式典の開催に至る過程、式典の内容の検討を通じて、この式典が民衆ではなく君主の主導で実現されたことを明らかにした後、ビラの挿絵の内容を検討し、当時のプロテスタントのプロパガンダの実態と意義を論ずるとともに、約400年前に作成されたビラが現代の宗教改革史研究に与えている影響について考察した。

「百年記念」式典の開催の主導者は、プファルツ選帝侯フリードリヒ5世とザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルグであった。カルヴァン派のフリードリヒ5世は、プロテスタント諸侯・都市の対カトリックの軍事同盟のリーダーであったが、1617年4月23日にハイルブロンで開催された同盟の会合において、この式典の開催を提案した。この式典を通じて彼はルター派とカルヴァン派の結束を強めるとともに、自らも属するカルヴァン派のルーツがルターの宗教改革にあること、すなわちカルヴァン派がルター派の親族であることを主張し、1555年のアウクスブルクの宗教和議では公認されなかったカルヴァン派の公認を目指した。他方、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルグはルター派であり、現状肯定の立場からこうしたカルヴァン派とフリードリヒの攻勢を警戒し、ルターの保護者であったフリードリヒ賢公以来の帝国のプロテスタント指導者としての地位を再確立しようとした。また、当時ザクセン選帝侯領のルター派は、穏健なフィリップ派と急進的な純正ルター派に分かれて争っていたが、選帝侯はフィリップ派の勝利を後押ししようとした。この内外の要請に応えるために、彼は式典の開催を望んだのである。

以上の2人の領邦君主によって主導された式典は、民衆主体の祝祭ではなく、彼らの教化のための行事というべきものであった。すなわち、各地で行われた式典のプログラムは、概ね教会での説教、大学での討論、初等・中等学校での教理問答を柱としていた。また学校では生徒たちへの記念メダルの配布が行われるなど、プロパガンダの要素も備えていた。

こうした式典と関連して出版された数々のビラの挿絵は、ルターという人物を「歴史的個人」として、彼による「95か条の論題」の発表を「世界史的事件」として人々に印象づけるものであった。また、ビラには贖宥状を販売した修道士テッツェル、そしてアンチクリストとしての教皇の姿もしばしば登場し、贖宥状販売という悪行がルターの改革の原因であり、彼の改革はアンチクリストである教皇の支配と誤謬からのキリスト教の解放を実現したのだという歴史認識が強調される。さらにルター派領邦や都市で出版されたビラには、ルターと並んでメランヒトンが登場し、彼の役割が強調されるが、この意味は上述のルター派内部の争いとの関連から説明できる。

これら印象的なビラの挿絵は、17世紀当時の歴史的動向ばかりでなく、現代の宗教改革史研究の動向にも影響を与えたと考えられる。すなわちこのビラは、1618年のプラハでの争いを、ヨーロッパ全体を巻き込む三十年戦争へと発展させる促進力となったと推定される。またビラに描かれた、贖宥状販売から「95カ条の論題」の発表、そして教皇の敗北という図式は、現代の歴史教科書に典型的にみられる「マルティン・ルターの物語」としての宗教改革イメージの原型であろう。1617年のビラに描かれた図像は、イコノロジーという方法論を通じて読み解くべき歴史を映す鏡であるばかりでなく、積極的に歴史を構築する、紡ぎ出すかのような力をも備えているのである。

こうしたプロテスタント側の動向に対して、カトリック勢力は有効な対応ができなかったようだ。式典の批判を目的とするビラは少なく、印象的な作品はさらに少ない。16世紀後半のカトリックの論客たちは、ルターの後継者を批判する目的で、しばしばルターを肯定的に描きだした。後継者の現状がルターの教えに矛盾していることを主張し、支持者たちを離反させようとしたのである。しかし、この16世紀後半以来のカトリックのプロパガンダ戦略は、1617年におけるルターへの批判の矛先を著しく鈍らせることとなったと考えられる。